

「虐待」関係の三つの番組を見て

日を置かずに、「なぜ我が子を…児童虐待の実態」…番組①、「虐待の傷は癒えるのか」…番組②、「ホーム そらまめ～“独り立ち”までの3年間～」…番組③の虐待関係の3つの番組があったので見た。

番組①は、「感情をコントロール出来ない。」と育児に悩む母親を、ご主人の了解の元、自宅に2週間固定カメラを据えての我が子への虐待の実態様子であった。

夫婦間、親子間のこじれは当事者同士での解決が難しく関係機関のたすけを借りる必要性から、夫婦は児童相談所に相談し、これからも夫婦共々継続相談を受けることを決意するまでの様子が取材されていた。

番組②は、児童養護施設では対応できないほどの心の深い傷をもつ子どもたちの情緒障害児短期治療施設での様子が、半年以上にわたり取材されていた。

例えば、ある少女は高校になっても、食堂で好きな女性スタッフの隣に他の子どもが座っていたことがストレス発散の切っ掛けとなりパニックを起こす様子、等々。

少女に、直接的な感覚だけでなく好きな人のイメージが保持されるようにスタッフの工夫等も取材されていた。

番組③は、虐待から15才まで児童養護施設で過ごした少年の自立支援ホームでの3年間を追い、転職を繰り返しながらも好きな仕事を見つけてホームから社会人として自立していくまでが様子が取材されていた。

ホームに来た頃は、笑顔もなく人とのコミュニケーションも苦手だった少年が、ホーム管理の夫婦や他の同居少年たちとの交流の中で、家族としての温かさを感じ取り、ホームから自立していく頃は笑顔も多くなり、自分の想いをしっかりと云え、人とのコミュニケーションも苦しめない表情は頼もしくさえ感じた。

こうした事例の数々から、虐待問題の根の深さ、受けた心の傷の深さと複雑さを知るが、一方、虐待問題を通して、生んだ親でなく子どもにとっての生きるエネルギーの補給基地であり、人と係わる生きる喜びを感じさせてくれる「オ母サン（HP「雑学 BN」の覚え書関係（Ⅱ）、「オ母サンのもつ機能、心の居場所、しつけ（覚え書）」：参照）の存在の大事さを改めて痛切に感じる。

番組②の女性スタッフは、少女がパニックした時にも、『「とことんあなたに付き合うよ。あなたから逃げないよ。あなたのことを見ているよ。」と伝えられる対応を続けたい」と語っていたが、ここには正に「オ母サン」が居る。